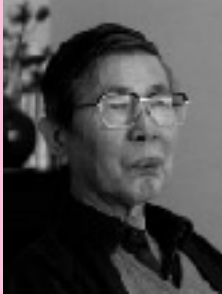


執念の作品蒐集 若杉鳥子の作品集を

しゅつしゅつ

自費出版



林 幸雄 さん
(宮前町・68歳)

明治 24年から昭和 12年の 45歳の生涯を、常に病と戦いながら、社会の底辺に生きる女性の痛みを確かに受け止め、明るい未来への展望を模索した女流プロレタリア作家の若杉鳥子。

没後 60余年、世に埋もれてしまった鳥子の作品を、『女子文壇』から『文芸戦線』『戦旗』『婦人公論』など 440余種の雑誌から手探りで探し求め 3冊の作品集にまとめ自費出版した林幸雄さんに、話を伺いました。

「小学校の教員生活の最後の年（平成 7年）に郷土資料室をつくりました。作業の過程で「出城歴史館」目録の作成に取りかかります。ちょうどそのころ、市民新聞（井上守氏発行）に鳥子の遺稿が掲載され、新日本歌人協会の奈良達雄氏も鳥子に関する小冊子を出版されました。

そのころ、鳥子の作品は、茨城新聞社が出版した「茨城近代文学選集」等に数編が掲載されて

ぶんがくかん
Vol.178

古河文学館のこと

粕谷栄市 詩人)

古河市は、上野駅からJR宇都宮線でほぼ1時間ほどの位置にある、人口6万余の小さな町である。と言っても、その歴史は古く、かつて「古河公方」が館を構え、下総国にあって土井家16万石の古河城のあった城下町である。

馬琴の八犬伝では、その古河城の天守、芳流閣の屋根の上で、組み討ちになった2人の英雄が、そのまま、眼下の渡良瀬川？に転落するのだが、残念なことに、利根川と渡良瀬川の合流する水郷にあった古河城は、明治の河川改修で失われてしまった。

かわりに、約30平方キロと言われる、広大な谷中遊水地が、すぐ近くに広がる。田中正造が、必死の直訴をしたことで知られる「足尾鉍毒事件」によって滅亡した、旧谷中村のあとである。「古河文学館」は、そこから、歩いて10分もかからない、古河城の出城跡にある。

この一郭は、となりに、「古河歴史博物館」があり、渡辺華山筆による国宝「鷹見泉石像」の主である、古河藩の家老鷹見泉石の邸もあって、往時を偲ぶべく風致豊かな恰好の散策の場所である。



土井家が、唐津から国替えになったこと、また利根川水運によるこの地方の物産の盛んな交流の地であったこともあって、古河は、外界の文化への広い視野を育てる土壤を持っていたと言えるかも知れない。幕末の画家、河鍋暁斎も、そこから生まれたのだろう。

その点で、茨城県にありながら、日光街道に位置して、埼玉、栃木、群馬、千葉にも隣接して、水戸や土浦とは、ことばの訛りからして、全く文化圏を異にする。その気風は、いわば、北関東の無国籍のそれである。

歴史を背景にもつ自由な好奇心。文学の根源にそれが必要だとしたら、この町の気風は、本当は、十分それにふさわしいものなのだ。「古河文学館」

が、平成10年に、個性的な瀟洒な外観と内容を持つ建物として竣工されたのも、どこかにそれが生きていて、有志の人々の心を動かしたものであろう。

(2004年1月1日の日本近代文学館館報に掲載された原稿を、今回と5月号の2回に分けて掲載します。)